

## 十勝が舞台！「農村ホームステイ」から食の大切さを学ぶ

### 浦幌町 NPO法人食の絆を育む会

どこまでも広がる大地に、海、山――。

十勝という食材に恵まれたフィールドを活かし、若い世代に思い出と食の大切さを伝えようとしている団体がある。高校の修学旅行などを通じて生徒たちを十勝管内の農山漁村で受け入れ、学校教育と連携して行う「農村ホームステイ」事業を展開するNPO法人「食の絆を育む会」だ。

ホームステイ自体は、2009年から理事長の近江正隆さんがノースプロダクションという株式会社で、「一般人を対象に『食』を育む農林漁業を、生産地十勝で農村ホームステイ体験してもらうことによって理解を深め、消費者と生産者との絆を育んでもらうこと」を目的に実施したのがはじまり。

2012年、3月30日にNPO法人として認証され、登記は4月6日。

平成21年度（2009年）に試験的に受け入れたのは大阪の東百舌鳥（ひがしもず）高校。このときはまだ、ラフティング

などと共に体験メニューのひとつに組み込まれ、25人が参加しただけだった。受け入れも浦幌町のみ。平成22年度は3校1000人が体験。平成23年度はさらに増え、6校2000人、昨年度も6校2000人が参加した。

平成22年度からは受け入れ地域も拡大して、現在では音更町、清水町、新得町など16市町村までになっている。会は、受け入れ家庭のある地域協議会の10団体で構成されている。平成25年度は、受け入れ家庭がさらに増える予定だという。現在のところ、参加する高校は、北海道を修学旅行先にすることが多い、大阪や広島など道外のみだが希望する高校があれば、道内の高校も受け入れられる予定だ。



子牛にうれしそうにミルクをあげる女子高生

## ■ 家族のようなふれあいの時間

ホームステイは1泊2日が基本。ひとつの家庭で2～3人を受け入れる。受け入れ家庭には、生活体験に係る実費が支払われる。現地に着くとまず入村式を行い、その後各家庭へ移動する。受け入れ先によって体験作業は変わるが、畑作農家だと収穫の手伝いやトラクターの試乗、山村では林業について教わったりするなど様々。

こうした仕事の現場での体験を通じ、食とのつながりを肌で感じたり、生産者の話を通じて、現場の苦勞も知ることができる。

作業が終わると夕食。生徒と受け入れ家庭が共同で調理をすることで家族のようなふれあいをもつことができる。次の日も作業し、最後は閉村式をして、受け入れ家庭が生徒たちの見送りをする。



家族と食卓を囲むということ自体が生徒には新鮮にうつる

## ■ さらに食の理解深める

### 「事後学習」

終了後の感想では、「楽しかった」の声が最も多いが、都会からきた生徒たちにとって、3世代が同居して家族みんなで揃ってごはんを食べることや他人の家で生活すること自体が貴重な体験で、家庭の温かさを感じるのか、見送りの際には涙を流す生徒もいるという。「ありがとう、またくるねという言葉と共に泣いてしまう生徒も少なくありません。一緒にいる時間は実質10時間ほどにもかかわらず、泣いている姿には驚きました」と事務局の関谷繁さん。

この体験を通じて就職に農林水産業を選んだり、十勝に住みたいと大学を受験する生徒、今まで苦手だった野菜類が食べられるようになった生徒もいたそう。ホームステイが終わった後でも手紙や年賀状のやりとりをしたり、再会したりするなど交流が続いている。

こうした体験を通して生産者が身近な存在になるのを一過性のもので終わらせるのではなく、体験を振り返り、より食やそれらを育む営みの大切さを伝える「事後学習」事業にも力を入れている。近江理事長が各高校を回って、食の大切さの講義や受け入れ

家庭からのビデオレターなどを流すことで、生活体験を振り返ったり、食や農業を考えるワークショップを行ったり、農村から取り寄せた食材を使った家庭科実習などを実施したりしている。

最初の年の事後学習は1校2クラスのみだったが、ホームステイ体験をした修学旅行担当の教師が事後学習の必要性を感じるようになって、平成25度は5校1800人を予定。



「ありがとう、また来るよ!」。たった1日でも受け入れ家庭との別れは名残惜しい

## ■ 受け入れの輪を広げる

現在、受け入れ家庭を増やすために、農閑期に説明会を開いたり、地道な活動によって裾野を広げている。

生徒の感想文やお礼状を読むことで「また来年も」と受け入れ家庭のリポートにつながっている。しかし、受け入れ

家庭の中には、生徒たちに振る舞う料理なども含めて、つつい力を入れてしまい、疲れてしまうところもあるという。

さらに修学旅行時期の9、10月は繁忙期とも重なる。こうした課題を解決するために、この1、2月には、2年、3年目の受け入れ家庭と初めて受け入れた家庭同士で、「こんな体験をさせてあげた」「こんな食事で喜んでくれた」などといった意見交換の場を設けた。

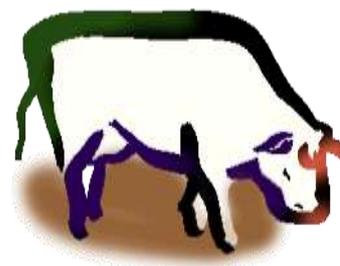
「受け入れ家庭の負担が増えると、今後この事業を続けていけなくなってしまいます。なるべくありのままの日常で受け入れてもらいたいです。理想は、ひとつの家庭で年に1～3回の受け入れだと受け入れ家庭の方たちも話しています」と関谷さん。

2月下旬には、受け入れ家庭だけではなく、一般の方や十勝管内にある企業を対象にフォーラムを行う。賛助会員を募集していることもあり、趣旨に理解し、活動に協力してもらおうのが狙いだ。

「食の大切さを伝えるために、活動の主体である受け入れの輪を広げて十勝全域で共通認識をもちながら、細く長く続けていきたいですね。ただ、この事業の主体はあくまでも農林魚業を営んでいる方々であって、私たちはその活動のお手

伝いをさせていただいているだけです」  
と関谷さん。

農村ホームステイを実施する市町村は  
他にもある。しかし、十勝の誇る食と体  
験学習のコラボは、北の大地と都会を結  
ぶ新たな活動として輝きを増している。



■ 連絡先

〒089-5601 十勝郡浦幌町字宝 53-26

NPO法人食の絆を育む会

代表名 近江 正隆

TEL 0155-78-7955

FAX 0155-78-7956

Eメール info@shokuhug.com

URL <http://www.shokuhug.com/>